医学系研究科・医学部に関する記事

２０１６年６月７日（火）さきがけ　２８面

秋大・妹尾名誉教授に学術賞

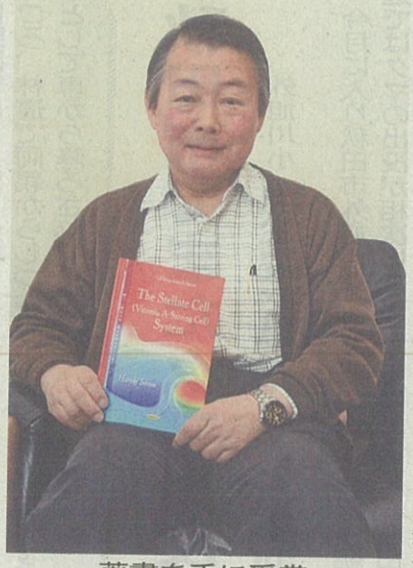
日本結合組織学会

肝臓の星細胞研究を評価

秋田大名誉教授の妹尾（せのお）春樹さん(65)＝細胞生物学＝が、コラーゲンやヒアルロン酸といったマトリックス関連分子の専門家でつくる日本結合組織学会の学術賞に選ばれた。肝臓内でコラーゲンを作ったり、ビタミンAをためたりする星細胞に関する長年の研究が評価された。24、25日に長崎市で開催される同学会の第48回学術大会で表彰される。

妹尾さんは、東京医科歯科大に在籍していた1984年、肝臓内にある星細胞の取り出しに初めて成功。この細胞が肝硬変の原因となるコラーゲンを作っていることや、ビタミンAによってコラーゲンの増加が抑制できることを突き止めた。

94年に秋田大に移った後も、一貫して星細胞の研究を続けた。北極圏のシロクマが人間の200倍のビタミンAを肝臓内に貯蔵しているメカニズムについて、ノルウェー・オスロ大と共同で解明を目指すといったユニークな研究にも取り組んだ。



著書を手に受賞を喜ぶ妹尾さん

星細胞の研究成果は、肝硬変の治療や肝がん予防に道を開くものとして注目され、臨床応用に向けた研究が、米国を中心に進んでいるという。一昨年には自身の研究成果とその後の展開をまとめた医学書を、米ニューヨークの出版社から刊行した。

妹尾さんは現秋田大大学院医学系研究科細胞生物学講座の教授を20年余り務め、今年3月に退官。現在は岩手県釜石市の医療法人に副理事長として勤務している。「周囲のサポートにより、秋田大では非常に良い環境の中で研究に打ち込めた」と感謝の思いを口にする。

「若い時に内科医として臨床に携わり、肝臓の病気で亡くなる患者を目の当たりにした。救いたいという思いが星細胞の研究を志すきっかけになった」と振り返り、「基礎医学は地味な分野と思われがちだが、新たな治療法を確立するために非常に大事。若い人たちに後に続いてほしい」と語った。

学術賞は、結合組織の研究や学会の発展に貢献した会員が対象。2005年の創設以来10人が受賞しており、今回は妹尾さんを含め3人に贈られる。（斉藤賢太郎）